様式第９号（第４条４関係）

論文審査結果報告書

論文提出者氏名　鶴田　実穂

学位論文題目　Relationships between pathologic subjective halitosis, olfactory reference syndrome, and social anxiety in young Japanese women

審査委員（主査）　角舘　直樹　印

（副査）　柿木　保明　印

（副査）　秋房　住郎　印

論文審査結果の要旨

Pathologic Subjective Halitosis（PSH：主観的口臭）とは、明らかな口臭が認められないにもかかわらず、口臭を気にする病態であり、主観的口臭ともよばれている。また、Olfactory Reference Syndrome（ORS：自己臭症）は体臭や腋臭等の身体の臭いを気にする病態であり、PSH との関連が示唆されている。さらに近年、対人関係において感じる不安と定義される Social Anxiety（SA：社交不安）と PSH との関連も示唆されているが、これらの相互の関連についての詳細は不明である。そこで鶴田実穂氏らは、PSH、ORS および SA との関係性を明らかにすることを目的として本研究を実施した。

研究デザインは横断研究であり、日本の大学、短大および専門学校に在籍する 18～24 歳（平均年齢 19.6 歳、標準偏差 1.1）の女子学生 1360 人を対象に自記式の質問紙調査を行った。PSH、ORS、SA の測定にはそれぞれ、角田ら（2000）、松下ら（2010）および岡林ら（1991）の測定尺度を用いた。また、エチケットとして臭いを気にする項目として口臭、体臭、腋臭および足臭についても併せて調査した。PSH、ORS、SA およびエチケットとして臭いを気にする項目についてベイジアンネットワーク分析を用いてそれらの項目間の関連について解析した。

対象者を PSH 尺度の得点に基づいて 3 群（Normal、Moderate、Severe）に分け、グループ間における ORS 尺度および SA 尺度の得点の差を検討した。その結果、ORS および SA 尺度得点は Severe 群、Moderate 群、Normal 群の順にスコアが高く、統計学的有意差が認められた（Kruskal-Wallis test、$p<0.001$）。また、ベイジアンネットワーク分析の結果、エチケットとして臭いを気にする項目において、口臭と体臭への意識が PSH に影響していることが示され、さらに SA が PSH と ORS に直接的な影響を与えていることが明らかとなった。すなわち本研究の結果は、SA が PSH および ORS の原因の一つであり、PSH の治療において SA に対する介入が有効である可能性を示唆するものである。

申請者の鶴田実穂氏に対し、主査及び２名の副査により公開審査において研究デザイン、分析方法、および研究の意義等について質疑応答を行った結果、概ね適切な回答が得られた。以上のことから、本論文を学位論文として価値あるものと判断した。